うぐいすは、ひよどりと

久保田　さちこ

「かあちゃーん、どこいったのー」
　ひよどりのこどもは、木のえだから、かあちゃんをよびました。
「さびしいよー、ピーヨヨヨ」
　うぐいすのおじさんは、くびをもたげて、ひよどりを見あげました。ひよどりのかあちゃんは、きのう、おおたかにやられてしまったのです。
「かあちゃーん。かあちゃーん」
　ひよどりは、なきつづけます。うぐいすは、きのどくになりました。
「なくなよ。あんたのかあちゃんは、どんなによんでも、こられないところにいったんだ」
「なんで。なんでそんなこというの！」
　ひよどりは、とんでいってしまいました。
「ああ、きらわれちゃったよ」
　うぐいすは、ためいきをつきました。
「ケキョケキョ、ホーホケキョ、ホーホケキョ」
　うぐいすはさえずります。上をむいて、心をこめてさえずりました。
「おじさんいい声だねえ」
「あれ？　もどってきたのか」
　ひよどりは、いつのまにかうぐいすのおじさんのそばにいました。
「いいなあ。ぼくも、ないてみようっと。ピーヨヨヨ。ピーヨヨヨヨヨ」
　ひよどりは、くびをかしげました。
「あれ？　ぼくも、おじさんみたいになきたいのに、口がちがうこと言う」
「いい声じゃないか。わしはすきだなあ」
「おじさんは、かあちゃんにおしえてもらったから、いい声でなけるんだね。ぼくはもう、おしえてもらうこともできないんだ」
　ひよどりは、なみだをちょろんとこぼしました。
「ピピピピピッ。やっぱり、むずかしいなあ」
　うぐいすは、ひよどりのかあちゃんが、ひよどりを、子そだてしていたのを思い出していました。けれどこれからは、自分で大きくなっていくしかないのです。
「これはさえずりと言うんだ。あんたはひよどり、わしはうぐいす。あんたは子どもなのに、おじさんよりも大きいだろ。まねをしてもむりなんだ」

「いやだ。おじさんみたいになきたい」
「わしは卵からかえって、すぐにかあちゃんがいなくなってな。はじめはへただったけど、れんしゅうしたんだ。わしも、かあちゃんにはおしえてもらってないよ」
「おじさんも、かあちゃんいないの？」
　ひよどりがまるい目をむけました。
「ああ。いなくてもな。かあちゃんは、空の上できいているぞ。ずっとずっと上だから、見えないけどな。けど、ぜったいにいるんだ」
「そうかなあ。ピピピピピッ。かあちゃん、きこえているかなあ？　ピーヨヨヨヨヨ」
　ひよどりは上をむいて、声をはりあげます。うぐいすは目をとじました。すると、ひよどりのかあちゃんが笑っているのが見えました。